
紅紫の騎士～救世主の少女～

緋色 志輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅紫の騎士／救世主の少女

【NZコード】

NZ3536N

【作者名】

緋色 志輝

【あらすじ】

いつも一人だった私を救ってくれた親友を護るために命懸けで戦う

「お前邪魔だ。彼女は俺達が護るだから黙つていろよ」

「何故このような無関係の人間がいるんだ」

たとえ邪魔だと言われて嫌われても親友さえ護れば私は・・・

ある時私は親友と共に異世界に落ちた。

そこで親友はその世界を護る救世主だと告げられ、私はオマケ扱いにも負けず親友を護りつゝ・・・

頑張つて更新したいと思います。

なおログインが突如できなくたなつたため新たに登録しました。

内容は変わってないはず。

完全に他のサイトからの移動してきたものです。

嘆きの世界

「お願い奪わないで、私が」

涙を零し、地面に崩れ落ちる少女

「貴様は私達を裏切るんだな」

激昂する美しい女性

「今まで騙していたんだな」

逞しく勇ましい男性が鋭い眼差しを向ける。

「お前は世界に仇なす敵だ」

憎しみが籠つた青年の断言

それを受け止めながら、優しく少女は笑う。

「こんな世界など私は知らない

だから勝手に滅びてしまえばいいのよ

幸せげに笑う表情とは裏腹なその言葉に誰もが氷つく。

擦り傷だらけの体を引きずりながら少女は前を歩いて歩く。

周りはそんな少女に目を向ける事はない。

右手首が痛い。捻ったかな。

唇を噛み、痛みを我慢する。

もう少し、部屋に帰れば

そしてもう少しと言つてこゝで角から来た人間に少女は突き飛ばされた。

「悪い、ちつ。お前か」

その人、年の頃20歳前後の青年は尻餅をついた少女に手を伸ばして、少女だと確認して顔を嫌悪に歪める。

嫌な人間、マルスに出会った。

「邪魔だ。通路を塞ぐな。」

謝りもせずに、青年マルスは去つて行った。

その後ろ姿を睨んだ後、立ち上がり部屋へと戻つて行く。

痛む節々を気遣いながらベッドに横になる。

目をつぶり、疲れた体を休める。

張り付いたセミロングの髪をうつとうじいと感じた。

「頑張らないと、じゃないと譲れない。」

眠気が襲い掛かって来るのを我慢しながら、少女夕月颯妃は拳を握る。

泣き出す痛み

長いこの国の歴史の中で、一度伝えられる魔族の襲来

一度目は現在より約400年前

狂暴な下位の魔族を率いて、貴族の魔族達が人間に襲い掛かつて来た第一次魔族襲来

一度目は150年前

魔王と名乗る者が上位魔族を多数引き連れて、その巨大な力で人々を支配もしくは破滅させようとやって来た。

どちらもなんの抵抗も出来ず敗れるとされたが、そこに三人の人物が立ち上がった。

第一次に活躍したのは

「光輝の御子」

主に光魔法を得意とし、神官だと言われる、初代の御子

「女王」

国を滅ぼされたハーフエルフ、珍しい重力魔法を駆使し戦つた

「鷹」

元奴隸で、魔法が使えず身体能力のみで戦っていたとされる謎多き

人物

彼らの圧倒的な力により、世界は救われた。

次に第一次に活躍したのは

「黒魔女」

彼女は、この時代の最高峰とされる魔力を持つ魔女で、「女王」の最後の弟子でもある

「疾風の愛し子」

精霊魔法師、特に「風」に愛された者、後に魔法学院を設立した。

「夢幻の神子」

言霊使い 旅芸人として世界を放浪してたが、神託により神子の位に上がった。

熾烈を極めた戦いを沢山の犠牲をだして止めた三人

だからだろうか

彼の英雄達の生まれ変わり達が再び世界の危機には必ず現れると語るのは

そして今代、三度目の魔族の来襲により

英雄達の生まれ変わりと言われる三人が集められた。

一人は帝国の若き第三皇子であるグレイ

二人目は天才と名高い魔術師のリーフ

そして最後に異世界より召喚されし、巫女コーナ

現在彼等は帝王国宮に隣接する神殿で時が来るのを待ち構えていた。

そう、コーナの召喚において巻き込まれた颶妃などのことを持ち語らす。

召喚に巻き込んでおきながら国が颶妃にしたのは、王庭の北隅の部屋に必要最低限の食事

コーナこと優奈との一切の会話との謝絶

身体への暴力とも言える兵士の訓練、そして精神を傷つける暴言だった。

優奈に会うために颶妃は全てに耐えていた。

たとえ、苦しく寂しくても

傷付き、血を流しても颶妃は一生懸命耐えて待ち侘びていた。

今にも倒れそうなまでに、やせ細り肌は血の気がなくなり真っ白である。

そう気力だけが颶妃を支えていた。

誰にも省みられない日々

大事に胸に下げるペンダントを抱き、癒える事がない傷とともに既

りにづく。

優奈が時とともに颯妃を思い出す回数を減らしているのを知らないまま

フラフラと歩く颯妃

その姿はまるで幽霊のように儚い。

そんな姿を見て、周りにいた者達がコソコソと話しあう。

一様に嫌な顔で笑い、もしくは顔をしかめている。

しかし、颯妃は気付いていない。

周りを気にする事など今の彼女には不可能だ。

最近慣れたはずの空腹感

今日に限っては時折、意識を持つていかれる事になる。

何か口にしなければ

しかし、颯妃に食べ物がもりえる当てはない

だから、仕方ないので王宮裏の森に入つて行く。

不慣れな森を進み、綺麗な小川につく

そこで水をがぶ飲みし、今度は食べ物がないか探しに歩きだす

小川沿いを歩いていると、なんとも毒々しい色の実がなつている。

震える手を伸ばし、一つもぎ取る。

そして、川で洗い一口かじった。

甘い、これは色は違うが林檎だ。

一気に食べると、次の実も取りお腹に納める。

何日ぶりだらうか

こりして固形物の食べ物を口に入れるのは

いつも硬いパンが一つと味の薄い具のないスープのみ

時々だが、ビスケットが数枚一緒に出される事も

だがこの数日はビスケットはおろかパンのないほとんどの湯のよう
なスープのみが出されていた。

久しぶりに食べる林檎は少し幸せそうに笑う。

そしていくつかの実をもぎ、来た道を戻つていく。

また来れば良いと考えたのだ。

だから大事そうに林檎を抱き、自室に帰つて行く。

苦しみ

林檎を隠し、力尽きたように横になる

今日はやる事はないゆっくりと休もう

瞼を閉じ、まどろみ始めた頃

叩きつけるように部屋のドアが開く。

瞼を開けることも億劫だ。

だが無視するわけには行かない。

瞼を開けようとしたが、次の瞬間に訪れた衝撃でベットから転がり落ちた。

「良い、身分だな。訓練を無断で休んで昼寝か？

一から教育した方が良いか？」

髪を掴まれ、持ち上げられた。

見上げれば、そこには大嫌いなマルスの姿が映る。

痛みはある

でも麻痺したかのように颯妃の顔色は変わらない。

「来い、その根性を直してやる」

一度髪を離し首元を掴み、マルスは歩き出す。

抵抗する力などない颯妃はそのまま連れて行かれかけ、途中でマルスが止まる。

「この匂い、クラベの匂いか?なぜこの匂いが」

辺りを見回し、マルスがクローゼットに近付き開けた。

そして、隠すよつて棚の奥の白い布の塊を見つける。

それを剥ぎ取り出てきた實に田が見開かれ

颯妃を床に投げ飛ばした。

「お前、クラベを、森に入つたな」

激しく怒りだしたマルス

床にうずくまる颯妃に追い打ちをかけるよつて蹴り上げる。

「この実は巫女様だけのための実だ

お前」ときが食べていいいものではない

恥を知れ」

罵倒しながらマルスは颯妃を蹴る。

しかし、無抵抗で何の返事も返さない颯妃に苛立つたのか

転がした。

そして、気付く。

弛緩した身体、口の端から血が少量流れていた。

膝をつき、首筋に手で触れ脈を確かめる。

脈は弱いが感じ取れる。

生きてる

よかつた、もし死んだのがバレたら巫女様が悲しまれる。

こんな奴のために巫女様が涙を流されるのはとても許せない。

仕方ないしに生かしてやつてるのだ。

鼻を鳴らし、颯妃を睨みつけてから去っていく。

そう床に放置して

颯妃が目を覚ましたのはそれから数時間

完全に身体は冷え切り、痛みで動くことも出来なくなっていた。

目を開けるも何かおかしい。

半分真つ暗で何も見えない。

見えていた世界

その世界が半分暗闇になっていたのだ。

もう夜なのだろうか?

激痛に堪え、身体を起こし、辺りを見渡すがやはり左側半分闇が広がっているのみ

「窓のところに、いかないと」

必死に身体を動かし、窓に向かっていく。

だが、躊躇たりぶつかつたりして平行感覚が定まらない。

瞼を閉じ、それから開くが暗闇だ

見えない

左目が見えなくなってしまった

衝撃が身体を震わせ、その場に崩れ落ちる。

「どうして?私が?

ただ優奈を守りたかつただけなのに

何故こんな事にならないといけないの

咳き、涙が零れた。

ずっと我慢していた涙がとめどなく流れ落ちていく。

シンシと静まり返った部屋で涙が涸れるまで泣きつけた。

そして涙が涸れた後、ゆっくりと立ち上がった。

痛む身体で小さなタンスから数少ない衣服等を傷んだ汚れたバックに詰め込む。

着ていた服を脱ぎ捨て、着替える。

「行かない」と、もうここには居たくない。

優奈を連れて元の世界に帰るんだ。

まずは帰る術を探さないと

綺麗な布で左目を覆い、簡単に整理し、バックを抱えて静まり返った部屋の外に出ていく。

「」を通る者は少ない。

だから簡単に抜け出すことが出来るのだ。

確か優奈は神殿とか言つ所にいるはず

会いたい。出来るなりこんな場所から出て行こうと提案しそう

久しぶりに足取り軽く神殿へと向かう。

意地悪されていないだろうか？

言葉などで苦労してないだろうか？

泣き虫な優奈は泣いてないだろうか？

色々な思いが溢れ出して行く。

囚われ

誰にも見つかることなく颯妃は神殿に入り込んでいた。

どこだろ、優奈はどうして

探し回り、庭に出でてしまった

困ったように辺りを見回すと

なんと優奈らしき人影がこちらに歩いて来たのだ。

喜んで駆け寄るとして、そこで優奈が一人じゃない事に気が付く。

慌てて近くにある物陰に隠れる。

話し声が段々と聞こえてきた。

「魔族達が現れる確率が上がってきた」

「ではそろそろ私達が出ないといけないんですね」

この声はまさか

恐る恐る覗けば、そこには優奈は

第三皇子だかのグレイ

魔術師のリーフと言つ女性

それに私の目の光を奪つたマルス

が寄り添つていた。

まるで最初からこの世界にずっと側にいたかのような雰囲気の優奈の三人との親密さ

目眩がした。

身体が震える。

凍り付いたように颯妃は四人の会話を聞いていた。

「世界を守るために、ユーナあなたの力が必要なんですよ」

はにかんだ優奈

いや、彼女は私が知つてゐる優奈じゃないユーナだ。

いつも自分の後ろに隠れていた優奈はもう居ない。

そう語った瞬間、世界は深い闇に絡み取られた。

呆然としている間に、ユーナはすでにどこかにいなくなり、じりじりにマルス達がやって来る。

逃げないと、心が警鐘を鳴らすが身体は言つ事は効かず

その場に座り込んでしまった。

「…誰だ、そこにいるのは」

颯妃に気付いたマルスが剣を抜き駆け寄ってきた。

動けず、そのままマルスに剣を突き付けられる。

「お前はっ」

「どうやら颯妃であることを見認したようだ。」

そして次の瞬間、冷たく殺意に満ちた表情で笑った。

「ちょうど良い。始末出来ないか考えていたところに、罪を犯してくれるとは」

剣の腹で颯妃の顔を仰向かせ、

「これで後腐れもなく、コーナ様も納得されてお前の死刑を許可して下さるだろう」

楽しげに目を細め

「聖域に何人たりと入る事を許されていないんだ。そこに侵入したんだお前は」

「衛兵、こいつを牢に繋げ

「罪人だ。」

声を上げた瞬間、幾人もの衛兵が現れ

颯妃を乱暴に縄で縛り上げ、引っ張った。

訳が分からぬ。

死刑？ なにそれ

私はただ優奈に会いに来ただけだ。

何故だ？ なんでこんなにも嫌われなければいけない

胸の奥底から言い知れない思いが込み上げて來た。

だからそれを口にしようとした息を吸い込んだが

思い切り引っ張られ地面に叩きつけられ、意識が遠退いていった。

だから次に目覚めてから考えた。

ああ、そうか

用意が良いのは当たり前か。

初めからこうするつもりだつたんだな？

罪を被せてそつまでして私を亡き者にしたかったのか

翌日になり、日が燐々と輝く田の前の光景にもつ驚きはしない

「最後に何かありますか？」

そう助けてようともせず、優奈が私に言葉を促す。

「この世界など消えてしまえばいい」

だからすっと思っていたことを口にした。

「貴様、コーナ様の温情で白氷の刑に減刑されたと言つて

優奈が首を振ると同時に、頷き颯妃を押さえ付けた。

「偉やうてまらスはないことしか思えない。

「これよつ白氷の刑を執行する」

リーフが軽やかな音階を刻みながら呪文が唱えられる。

耳障りな音とともに颯妃の足から氷が覆い出した。

名の通り、この刑は対象者を氷漬けにするものだ。

徐々に氷に覆われながら、颯妃はこの場にいる全てを見た。

「愚かしい者達、己の譏しさを後悔するといい」

胸の辺りまで氷つき、それでも睨む事は忘れない。

そして最後に優奈を見て

「認めない。優奈を絶対に認めない、拒絶する」

低く呟いた

すると胸の奥がカツと熱くなる。

それと同時に優奈も同じく胸を軽く押さえて不思議そうしているのを見ながら、颯妃は完全に氷に覆われた。

白い世界に一人ぼっちで立っていた。

私はどうしたんだろう?

何故か霞みがかっていて思い出せない。

苦しかった気がするが

ぽんやつとしていると、遠くから音が聞こえてきた。

なんだらうか？

気になり一歩踏み出せば、景色は一気に変わった。

赤い夕日に照らされ小さな少女がこちらに背を向けていた。

声を掛けようか迷つてると少女が振り返った。

まだ幼いにも関わらず少女は美しかった。

サクラ色の唇がゆっくりと動くが声は聞こえない。

おかしいのは分かつてたが、唇の動きを辿り颯妃は言葉を完成させた。

「もうあの世界の人間に私はいらないよつだ。」

去るつ、あんな世界など消えてしまえば良いのを」

優しい微笑を浮かべながらの言葉に颯妃は少女を凝視する

すると少女がこちらに近寄つて、いや違つ

知らず知らずに自分が少女に近付いていたようだ。

正面まで来て颯妃は急に涙がこぼれだした。

涙を拭いつとしたが止まることはなかつた。

そんな颯妃を少女は優しく抱きしめた

「もう大丈夫、悲しくて苦しいかもしれないけど

あともうひとつの我慢だよ

来るからね

ああ、苦しいんだ。

胸の奥底から冷たくてそれでいて搔きむしりたくなるような痛みが溢れ出してきて

我慢するばなんとか出来るのか？

来る？何が来るって言つんだ。

「とても優しい愛をくれる方、すべてを深淵に導く方」

よく分からぬ。

いや、その前にあなたは誰？ここはどこ？

私は、私は、

思考が追い付かず、パニックが起きた。

少女は頑張つて抱きしめる力を強くし、その力強い瞳を颯妃に合わせてきた。

「落ち着いて、ここは貴女にとっては安全な場所よ

誰も貴女を傷付けない。」

安全？傷付けない？

そこでぼんやりとしていた記憶が鮮明になり、溢れた。

「そうだ、私は優奈に、奴らに

温かい手が背中をさする

「ずっと、ずっと待っていたの

貴女がここに来てくれるのを」

淋しげに笑い、ゆっくりと少女が浮き上がり

颯妃を覗き込む。

「最後の答えよ

私は、ね

貴女自身よ、すべてを記憶するために分かたれた貴女

頬を軽く触り、少女いや颯妃自身が包み込むように光を広げて行く。

「さあ、私達が一つに戻る時間よ

恐れないで、次に目覚めた時貴女は・・・・・」

そして颯妃は光に包み込まれながら、ゆっくりと覚醒を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3536z/>

紅紫の騎士～救世主の少女～

2011年12月19日12時53分発行